

蓬萊町界限(その十三)

蓬萊町の電車(II)

林 順 信

☐日本人は博覧会好き

日本人ほど博覧会が好きで国民はないと言われているが、昭和四十五年の万国博覧会や、昨年の筑波の科学万博など、国民の二人に一人が見学に赴いた勘定になっている。

「博覧会」という日本語を考え出したのは、現在の一万円札の顔の人、福沢諭吉で、彼が慶応二年(一八六六年)に出版した『西洋事情』に出たのが最初である。幕末、英国に渡航した諭吉が、英語の EXHIBITION または EXPOSITION に当たる日本語を考えだしたに始まる。

(1) 何故、博覧会などというのか……?と疑問に思われるであろうが、実は博覧会と電車が切っても切れない関係にある。殊に、電車の上に表示される系統番号と博覧会とは、大変に関係が

深いからである。

明治の御一新以来、明治政府の志ざした二本柱といえ、富国強兵と興業殖産とである。

明治になってから、最初に博覧会を開いたのが京都で、明治四年十月に、西本願寺で京都博覧会社が主催したのが最初で、これは、東京の湯島聖堂内で、明治五年三月から、東京府と文部省が第一回の博覧会を開こうと着々と準備をしていたのに、突如として出しぬき、京都が駆け駆け開催に踏み切ったもので、当時、都を東京に持って行かれた京都が、意地を見せた一幕であった。

その後、勸業博覧会と銘打ったものが五四、そのほか、大規模な博覧会が、明治・大正・昭和と度々行われた。

- 第一回内国勸業博覧会 上野 明治 十年
- 第二回 " " 上野 明治 十四年
- 第三回 " " 上野 明治 二十三年
- 第四回 " " 京都 明治 二十八年
- 第五回 " " 大阪 明治 三十六年
- 東京勸業博覧会 上野 明治 四十年
- 東京大正博覧会 上野 大正 三年
- 平和記念東京博覧会 上野 大正 十一年
- 大礼記念東京博覧会 上野 昭和 三年

右にあげたごく代表的なものは、何れも会期は三、四月から八、九月までと、現在の博覧会

の開催期間と似ている。右のうち・印のついた博覧会が、路面電車に関係があるのだから驚く。

そもそも、わが国に一等最初に路面電車がお目見得したのが、第三回の勸業博覧会の時、上野公園でアトラクションとして、電車を運転桜雲台の五百メートルに、二台の電車が往復、片道二銭、往復なら三銭だった。

次いで、第四回の内国勸業博覧会の年に、二月、京都が市内から伏見に、営業路線として始めて路面電車を運転して、東京に一泡ふかせたのであった。この電車は狭軌(ナロウ・ゲージ)略して心電と呼ぶ)で、現在、愛知県の明治村で活躍しているのが、これなのである。

第三は第五回・最後の内国勸業博覧会の開かれた大阪で、市電が開通したのも、この年であった。この様に、博覧会のために集まった多数の人々を運んだり、市内見物をする人々をあてこんで、路面電車を敷設したことがわかる。

☐電車の番号は大正博覧会から……
 明治時代は、東京の路面電車の行先を表わす系統番号はなかった。蓬萊町の電車停留場が出来たのは大正四年三月八日だったから、明治時代は直接は関係がないが、電車は、正面上部に今日と同じく行先を漢字で書いた方向板掲げているのにすぎなかった。

ところが、大正三年(一九一四年)三月二十日から七月三十一日に亘る東京大正博覧会の際、

四月一日から、始めて電車の番号をつけた。しかし、これは、行先別の個々の番号ではなく、車庫番号であったが、とにかく何番という番号が付けられた。原則として時計の回りで、①番三田、②番青山、③番新宿、④番本所、⑤番大塚、⑥番巣鴨、⑦番三ノ輪、⑧番日比谷というものであった。これは菱形の金属板の中に、数字の部分を持ち落としたもので、電車の正面にはなく、側面（単車の場合は中央、ボギー車の場合は側面の前後に二箇所に取り付けられていた。金属板には彩色がほどこされていて、①番から黒、緑、赤、水、茶、ねずみ、橙、紫色の八色であった。蓬萊町に關係のあった巣鴨車庫は第⑥番で、ねずみ色の板をつけていた。数字が切りぬかれていたから、夜間は車内の電灯の光りで、数字が浮き彫りにされる仕掛けになっていた。しかし、番号が正面にないために、電車が目の前に来ないうちは、番号が識別できないという欠点があった。

蓬萊町の電停の方が右の番号より一年遅く出来たから、最初から⑥番の電車が、巣鴨駅から三田行というのが、白山上から横町商店街をぬけて肴町経由で来ていた。この巣鴨からの本郷経由の三田行は、大正十年になくなり、駒込橋から三田行が直行する様になったが、昭和十八年の戦時中に、古い線路が撤去されるまで、横町商店街には、電車の通らない数石とレールが

残っていたのを眺めながら、私は蓬萊町七番地から京華中学まで通学したのを想い出す。

白山上へ本郷有間が廃止になっても、この区間は乗換のできる交差点扱いであった。従って定期券の上には、実線が印刷されていなかったにもかかわらず乗換が出来た。学校を出てから神保町の小学館に入社した私は、本郷追分町から本郷肴町・白山上経由で神保町まで、都電の定期で通勤していた。

ある朝、本郷追分町から乗って肴町で降りようとしたら、車掌に私の定期はインチキだと言つてとがめられた。昭和二十七年のことだったろう。忘れもしない、古谷野という名前の車掌だった。

「あなたは、線もつながつてもしない肴町と白山上の定期を、自分で線を引いて持えたんだろ……？」

「いや、そんなことないよ。駒込の車庫だつて今まで、こうやって定期を作ってくれてるんだ。」

「神保町までなら、須田町で乗り換えて新宿行か渋谷行に乗り換えるのがほんとか。ちょっと車庫まで来てくれ!!」

「冗談じゃねえよ。今までこの定期で何でもなく乗ってるのに、こんなこと言うのはあんたが初めてだ。車庫まで行ってもいいけど、会社に遅刻したら、一体どうしてくれるんだ。」

こんな押問答の末、結局、駒込車庫まで行っ

て、正否を決めることになったが、車庫に行ったら、古谷野車掌の方が、モノを知らぬとおこられて幕となった。大正時代からの長年の実績で、白山上と本郷肴町間は、乗り換え自由だったのを、新米の車掌が知らなかったのだった。

☑車庫別の番号から行先ごとの番号へ

大正時代の第一次大戦は、大正三年から七年にかけて戦われたが、戦争後は、世界をあげて平和と軍縮が叫ばれた。大正十一年に上野公園で平和記念東京博覧会が開かれた。蓬萊町の長老の方々に、この博覧会に見物に行かれたご記憶のある方も居られると思う。実は、この博覧会に合わせて、全国から東京見物に訪れた人々のために、行先別に番号を付け、大きな横長の板に、經由停留場名を入れた番号板をとりつけた。主な橋經由停留場名入りの横長の板は、ついでこの間まで走っていた都電にも取り付けられていたが、大正十一年春には、とてつもなくでっかい横板がとり付けられた。

182 駒込橋、肴町、蓬萊町、本石町（室町三丁目）、新常盤橋、有楽町、市役所前、馬場先門、日比谷行

183 肴町、本石町、銀座、芝橋行

184 駒込橋、肴町、蓬萊町、須田町、本石町、市役所前行

右の三つの番号が、蓬萊町電停にやってきていたが、この三桁の番号は、東京全体で五五通

りもあるという複雑多岐に亘るので、東京の人でも面くらったと言われ、ましてや、旅行に来た田舎の人々には、フォークスのだったという。翌年関東大震災があつて、全車両一八〇五両中の四七%に当たる八八九両を焼失しては、この複雑な番号は自然消滅してしまつたという。

昭和四十六年三月十七日を最後として、電停蓬萊町は都電と共に消えたが、その時の都電は⑨番の王子駅〜八重洲通だった。この正面に取り付けられた番号は、これまた、今上天皇の御大札記念の博覧会の昭和三年四月から始められた、正面掲示の番号で、これは、昭和6年、昭和15年、昭和19年、昭和22年と、数度に亘つて改正されてきたもので、やや専門的になるが、次回にゆずる。

町会活動の概要

昭和61年11月から昭和62年2月まで

総務部

10月16日 市制実施（文京区）推進大会
11月5日 市制実施23区合同推進大会 国技館に於いて開催

(3) 12月10日 大島噴火災害義援金、当町会では81世

帯の方々から七万二千円の義援金が寄せられました。

12月10日 町会より門松絵ビラを各会員宅へ配布

防火防災部

11月22日 青年部の企画により防災座談会を海蔵寺をお借りして催しましたところ大勢の方のご参加があり、消防、警察、水道局、東京ガス、の係員の方と懇談し、皆さんから熱心な質問などあり有意義な催しでした。

11月23日 防災リーダー講習会が6中で開催され、役員、婦人部、青年部が参加

1月14日 ボヤ発生（向丘二二二二〇）発見が早く大事には至りませんでした。当町内での火事は、永い年月において無かつたようですが、ちょっとした不注意が大きな惨事を招きます。火の元には充分注意しましょう。

交通部

10月27日 交通部会を開催しました。

婦人部

12月20日 歳末たすけ合い募金 一金 一八一、五九二円

いつもながら町内皆様の深いご厚情によりまして、多額の金円をお寄せいただき誠にあり

がとうございました。

防犯部

12月3日 駒込警察署主催、防犯研修会が開催されました。

青年部

12月18日〜12月29日 町会との共催により「歳末夜警」を実施

1月4日 「やきいも大会」長元寺をお借りして催しました。落ち葉をたいての懐かしい焼き芋は、都会の中ではなかなか出来ないこと、参加した子供さん達にとって貴重な経験だったでしょう。

2月15日 「みんなで歩こう会」今回は谷中の七福神巡りを企画しました。子供から大人の方まで大勢の方が元氣よく歩かれて盛会でした。

文化部

町会員のご家庭で、本年成人式を御迎えにいられた方は、次ぎの皆様でございます。誠にめでとう存じます。当町会から心ばかりの御祝い品を御贈りしました。

浅野 隆様 堀江泰宏様 金子治基様
鈴木智子様 川瀬直子様 木原 茂様
本江伸之様 笹島智子様 清水友子様

小泉一雄様 小池誠二様 今井厚忠様
 宇佐見亮様 楠洋二郎様 本城義夫様
 永原あゆみ様

蓬萊町古寺巡礼

その四

長元寺（日蓮宗）

その昔「うなぎなわて」と言われた向丘高枝前の本郷通りの追分から北に向って、「浩妙寺」「勝林寺」「浄心寺」「長元寺」「大林寺」「十方寺」と右側は全てお寺である。この内、「万年山勝林寺」は江戸時代西の丸の小姓から將軍家重・家治の絶大な信頼を得て老中になつて栄進した田沼意次の菩提寺であるが、今は染井墓地の近くに移転して了つた。

「高耀山 長元寺」は、寺伝によると、寛永四年（一六二七）日長上人が駒込千駄木町、大田備中守屋敷の南側に創立した日蓮宗の寺院である。寛文二年（一六六二）に現在地に移転したが当時の敷地は門口四十六間、奥行二十四間で千八十坪と記されている。日長上人は谷中の日蓮宗感応寺（現在は天台宗で天王寺という）の第九世の住職で、有名な「谷中の五重の塔」を建立した人である。「谷中の五重の塔」は、戦後、浮浪者の失火で焼失して了つたが、幸田露伴の小説にも書かれ、当時は蓬萊町からもくっ

きりと遠望されたものである。長元寺は開創から七世位までは、小さな寺であつたが、八世の日寛上人の代に加賀藩、前田氏の外護によって寺觀を一新し、その後、代々の住職を京都、西の洞院の猶子を迎え、印証として御紋付法衣を許され、前田家の準菩提所となつた。

大正初期に市区改正により境内墓地約六百坪を道路敷地として無償収用され、その時郊外への移転も計画されたが、現在地にとどまつた。昭和二十年五月の空襲で全焼し、昭和三十三年に、鉄筋コンクリートの現在の本堂が完成した。また、昭和五十六年には、日蓮上人七百年忌の記念事業として、現在の庫裡が落成した。

寺内にあるめづらしい墓としては、「こもかぶりの四斗樽」の墓碑があり、言い伝えでは、実物のこもかぶりを持ち込んで石屋に刻ざませたもので、よほどの酒好きの仏であつたかと思われる。また、江戸末期の、儒学者であり、中国の宗・明時代の能書家の書法を伝えて名のあつた、小島成斉（一七九六—一八六二）の墓があり、さらに、渡辺華山の門下で、三河岡崎藩士、椋間青匠の墓もある。青匠は、大衣無縫の人であつたらしく、或る時、親友の椋山が家を訪れると、当人の声で「たゞ今留守」と言い、不思議に思つて家に入ると、まっ裸で坐つている。着物を洗つていて他に着るものがないからだといふ。

計 報

当町会にお住まいの方で、11月から2月までの間にご逝去された方々のご氏名は左記のとおりでございます。

謹んでお悔やみを申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

記

小泉順子様 布施淑子様 本江はる様

編 集 部

今年は無常とも言える暖冬、もうこのまま春が来るような日々が続きましたが、「暑さ寒さも彼岸まで」と申します様に、まだ、3月中の気温は寒暖の繰り返し、気温の急変には十分ご留意され、ご自愛専一にお過ごし下さい。

編集委員

小林音吉 竹中一馬 猪熊良晃 高橋一郎
 翁 松夫 池田 暉

◎次回の発行は六月を予定しております。